

## 「学校になじめない」

「NIWA 教育相談室」を法人化してまだ 10 年は経過していない。その前身は「教育総合相談室」であり、現場教職員のカウンセリングを主な取り組みとしていた。小泉内閣の構造改革特区政策により株式会社が高校を開校することが認められ、2004 年頃から全国に通信制高校が次々(20 校以上)と生まれていた。その余波の中で、私もとある通信制高校の設立に関わり、それを機にカウンセリング対象を教職員から不登校生徒保護者へと移し、「教育総合相談室」は不登校相談室となり、その延長線上に現在の「NIWA 教育相談室」があり「豊翔高等学院」がある。

不登校相談を始めて 15 年以上が経過し、不登校相談内容も随分変化が目立ってきた。何よりも原因がはっきりしない不登校が激増している。いじめや友達との大きなトラブルがあったわけでもない、気づかないうちに小さなストレスが継続的に蓄積され、やがて自分が嫌いになる(自己肯定感の喪失)ほどのストレスに悩まされ、学校への通学を心理的にも肉体的にも拒否し始める。

これには「むいてない」「馴染めない」という二つの傾向があるかもしれないと感じている。

ひとつは学校という教育スタイルに基づく生徒のストレスである。教師の授業を受けノートを取り、宿題をこなし、テスト勉強を経て定期テストに臨むというどこの学校にでもある普通の日常スタイルが生徒のストレスの基になっている。能力がないのではなくそもそも「学校にむいていない」という表現もできる。

ふたつめは、生徒の友達グループが極めて少人数になっていることかもしれない。6~8 人の友達でかかわっていた生徒たちが、今では 2~3 人がグループの単位であるらしい。多様な人の集団にはなじめず小グループを作るが、他のグループとの交流もない。共通して「関わることは疲れる」と言うらしい。学校の生徒集団に「馴染めない」ということができる。

そういえば、豊翔高等学院の生徒にも変化がある。今年の夏休みイベントは参加希望者が少なく中止した。提携しているフリースクールでも同様の傾向らしい。海水浴は魅力ではないのか(笑)、多様な集団の中で過ごす拒否感なのか、ならば日々のフリータイムの取り組みに積極的に参加させることは、重要な意味を持っていると思うがどうだろうか？

(丹羽 豊)